

「あなたがたも気をつけなさい。もしきょうだいが罪を犯したなら、戒めなさい。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい。」（ルカ17：3）

主は言われた。「もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この桑の木に、『根を抜き、海に植われ』と言えば、言うことを聞くであろう。」（ルカ17：6）

「命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか。あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたなら、『私どもは役に立たない僕です。すべきことをしたにすぎません』と言いなさい。」（ルカ17：9～10）

上記の記述は、著者ルカがイエスの語録、マルコ、マタイ福音書から、言葉を選び出し、ルカ風に編集したものと思われる。三つのことがテーマになっている。

最初は「赦し」である。主イエスは、つまずきは避けられないが、つまずきを与える者には災いがあると言われ、小さな者の一人をつまずかせるよりも、首に挽き臼を懸けられ、海に投げ込まれるほうがましであると、つまずきの罪の重さを指摘された。そして、「もしきょうだいが罪を犯したなら、戒めなさい。悔い改めれば、赦してやりなさい」と赦しを勧めている。一日に七回、あなたに罪を犯しても、七回「悔い改めます」と言うなら赦してやりなさいと繰り返している。七は完全を意味する数で、限りなく赦しなさいと言われている。キリスト教は、人間の罪の赦しが核心的なメッセージで、著者ルカは、主イエスの「赦し」の言葉を強調している。ただ、ルカは、赦しには「悔い改め」を前提にしている。主イエスの十字架による「罪の赦し」は悔い改めを前提とせず、一方的な恵みであるが、この記述は、悔い改めた者が赦されるというルカの信仰を背景にしている。

二つ目は「信仰」である。十二使徒たちは、信仰深い者になりたいと、主イエスに「信仰を増してください」と言った。使徒たちの願いに対し、主イエスは、「もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、この桑の木に、『根を抜き、海に植われ』と言えば、言うことを聞くであろう」と答えられた。小さなからし種一粒ほどの信仰があるなら、山にある桑の木を海に植われと言えば、その通りなる、信仰は小さくても、考えられない大きなことを起こし得ると言われた。マルコ、マタイ福音書では、「山が動いて海に入る」と書かれている。この言葉は、弟子が師の偉大な働きを見た時、師に対する賛辞の常套句であると言われている。私の小さな信仰を神は顧み、今日まで導いてくださったのだから、あり得ないことが起こるという上記の言葉を信じさせられている。

三つ目は「奉仕」である。この奉仕に関しては、厳しいことが要求されている。畑を耕すか、羊を飼う僕がいた。仕事を終えて、帰宅した僕に「すぐ食事の席に着きなさい」と言う者はいない。主人から「夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め、私が食べ飲みする間、給仕をしてくれ」と言われるだろう。そして、命じられたことを果たしたからといって、主人が僕に感謝することはない。主イエスは続けて、「あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたなら、『私どもは役に立たない僕です。すべきことをしたにすぎません』と言いなさい」と言われた。僕は主人に対し、全力で奉仕し、それをやり抜いても、誇りにはならない。なすべきことをしたに過ぎない。当時の主人と僕の上下関係の厳しさから、アナロジーとして、神に奉仕する人間の謙遜な態度を教えている。無私の奉仕は、神と人ともに喜ばれることは確かではないか。